

# モンゴル通信

NO.13

## 2,000kmの旅

今回の10日間の旅のルートは、ウランバートルから約550km南下し、ウムヌゴビ県で（凍った滝がある）ヨリーン・アム渓谷、ホンゴル砂丘、（恐竜の卵の化石が見つかった）バヤンザクを見た後、北上して山上のチベット仏教のお寺に寄り、さらに北西に向かい、かつてモンゴル帝国の首都が置かれていたハラホリン（カラコルムと呼ばれていたところ）を見て、ウギー湖に寄ってウランバートルへ戻るというもの。走行距離、2,000kmの旅となりました。

舗装されたアスファルトの道は、始めだけ。ガタガタの砂利道に、今にもはまってしまいそうな泥道、川を渡ることになれば、草原のわだちに横たわる羊と山羊が道を譲ってくれるのを待つことも...



砂利道



泥道



川渡り



羊待つ

## ウムヌゴビの自然と人々の暮らし

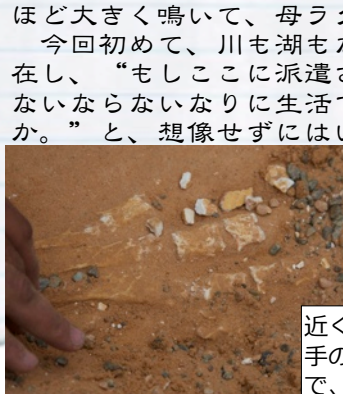
草原地帯に暮らす私にとって、ウランバートルから南下しながら見た景色は、これまでにないものばかりでした。草丈が短くなり、砂地にポツポツ草の塊が見えるだけになると馬や牛が減りラクダが増える。やがて草一つなくなると、遊牧民のゲルもラクダも見当たらなくなる。「水がないところでは、人間も家畜も生きられないからね。」とモンゴル人のドライバーは言いました。一見水が無さそうな砂漠地帯でも、ゲルがあったりラクダがいたりしたら、そこには生きるための水があるということです。

乾燥地に適したラクダ。そのコブの中は脂肪。14日間近く飲まず食わずでいられるだけの栄養が蓄えられて、照りつける暑い太陽を遮るのにも都合がいいそうです。しばらく食べていないラクダのコブは、でろんと垂れ下がっていました。

出産シーズンの春以降、放牧中の家畜の親子はいつでも一緒。子が親を追いかけ甘える姿がたまらなく好きです。ウムヌゴビのラクダの親子も変わらず一緒でした。子ラクダは「ンー」と耳を疑うほど大きく鳴いて、母ラクダを呼ぶのでした。



恐竜の卵の化石が見つかったバヤンザク



近くの遊牧民のおじさんが見つけた恐竜の手の化石。ビニール袋と土で隠してあるだけで、まだ発掘作業は行われていません。

なぜ人々はこんな厳しいところに暮らすのでしょうか。その理由は計り知れませんが、他の地では見られない美しい自然があることは確かでした。（富井愛）



ラクダの親子



ヨリーン・アム渓谷を馬で行く。この先には凍った滝が。



ホンゴル砂丘に登りました